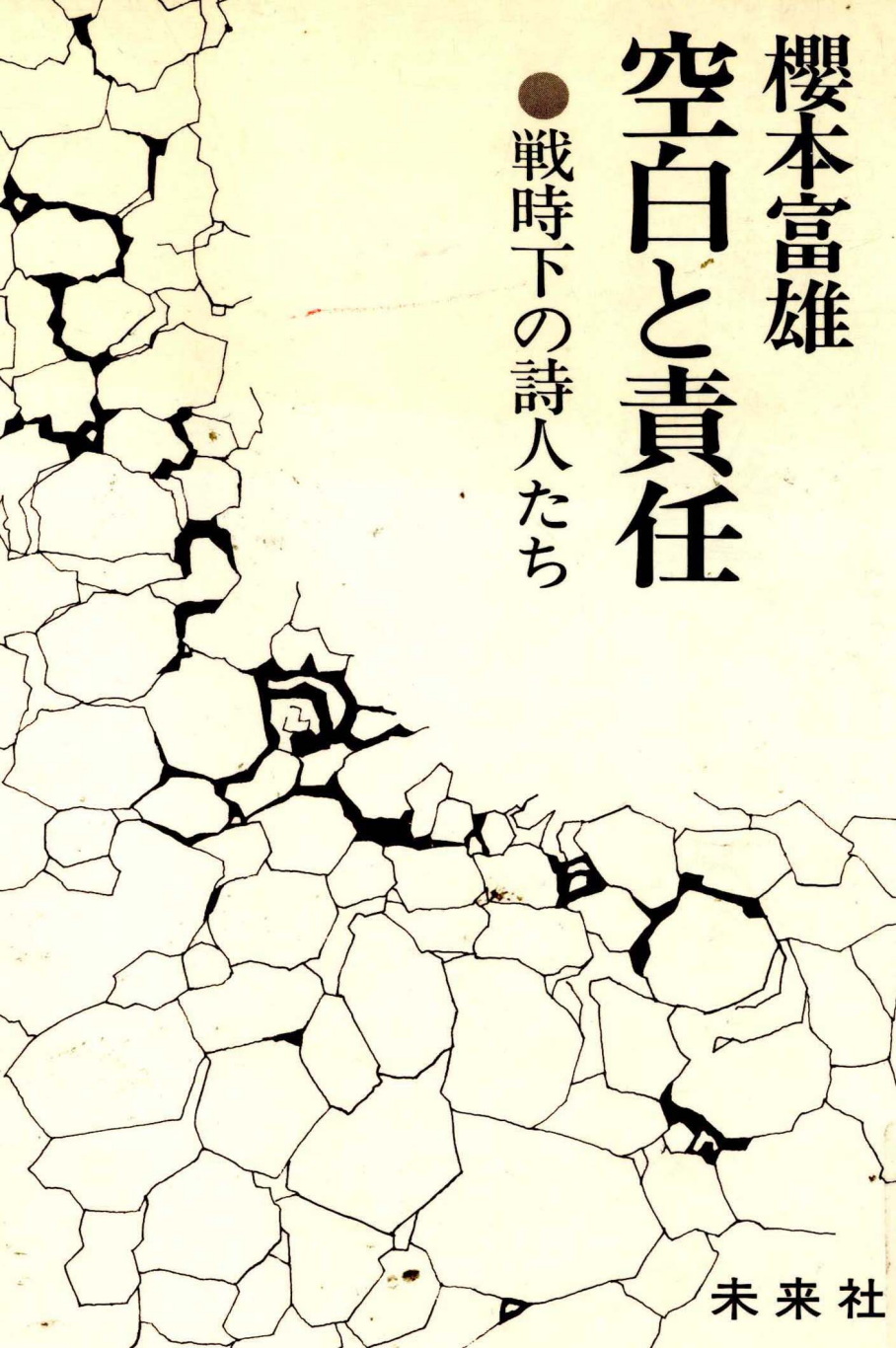
櫻本富雄

空白と責任

●戦時下の詩人たち



未来社

櫻本富雄

空白と責任

戦時下の詩人たち

未来社

櫻本富雄（さくらもと・とみお）
1933年　長野県に生まれる。
現在，かつしか幼稚園理事長。日本放送教育学会員。
主な著書と共著
『日の丸は見ていた』『少国民は忘れない』『詩人と戦争』『戦中少国民詩集・つばめの教室』『差別・戦争責任ノート』など。

空白と責任　戦時下の詩人たち
発行――一九八三年七月二〇日　第一刷発行
定価――二二〇〇円

著者©――櫻本富雄
発行者――西谷能雄
発行所――株式会社　未来社
東京都文京区小石川三―七
振替（東京）七―八七三八五
電話・（03）―814―5521～4

本文印刷――第一印刷
装本印刷――形成社
製本――今泉誠文社

空白と責任　目次

宴のはじまり　日本文学報国会詩部会の誕生　5
糊塗の全景　草野心平・愛国詩人覚書　34
金子光晴論の虚妄地帯　ルビンの盃と戦後の詩人たち　87
仮装の告白　中桐雅夫の戦後スタート　131
継承への訣別　200
あとがき　267

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

空白と責任

戦時下の詩人たち

宴のはじまり

日本文学報国会詩部会の誕生

1

一九四一年（昭16）十二月八日、日米戦争が始まった。日本政府は、この戦争の呼称を、支那事変を含めて大東亜戦争とした。いわゆる太平洋戦争で、日本政府はその性格を、「英米の暴政を排除して東亜を明朗本然の姿に復し、相携へて共栄の楽を頒たんと冀念する目的の、世界平和に貢献する自存自衛の聖戦」（政府声明）である、といった。

その頃の文芸界には、小説家・劇作家・詩人・歌人・評論家・大衆作家など、あらゆる部門の文筆家を対象とした文芸家協会や日本ペン倶楽部のほかに、いろいろな分野の文芸団体が乱立していた。

詩壇には、日本詩人協会・大日本詩人協会・国民詩協会・全日本女詩人協会・詩人懇話会・日本青年詩人連盟・満洲詩人会・大日本歌人協会・日本作歌者協会・日本詩曲協盟・日本俳句作家協会などの団体があった。

文芸団体乱立の事情を知るために、当時の社会状況を概括すると――

敗戦後、極東国際軍事裁判で、A級戦犯中唯一人の文官として死刑になった広田弘毅の内閣が、一九三六年（昭11）三月に成立した。広田は、軍部大臣現役武官制を復活し、軍部独裁政権への道を開く。

この後、内閣は、陸軍大将林銑十郎内閣になるが、政党勢力の抑圧に失敗、わずか四か月の短命内閣であった。

そして一九三七年（昭12）六月、近衛文麿内閣が成立する。周知の二・二六事件は、この前年に発生した。

近衛内閣は、一九四一年（昭16）までに、三度組閣されている。

一九三七年の第一次近衛内閣は、支那事変下（一九三七・七）で、「国民精神総動員運動」を展開した。

この運動は、挙国一致・尽忠報国・堅忍持久の三目標をあげて、国民精神作興を実施した。つまり、貯金・献金・贅沢廃止を唱えて、国民を長期戦態勢に総動員したのである。

金子光晴は、「永遠の平和に安らふ民あらんか／そはただ堕落の外なかるべし　（ーゲル）」と傍題する詩篇「抒情小曲　湾」で、この総動員に、つぎのように参画する。

戦はねばならない
必然のために、

勝たねばならない
信念のために、

一そよぎの草も
動員されねばならないのだ。

ここにある時間も
刻々の対峙なのだ。

なんといふそれは
すさまじい壮観！

（「文芸」昭12・10、特集「戦争を歌へる」金子光晴「湾」部分）

この詩は、蔵原伸二郎「遠征の歌」（「三田文学」）、長田恒雄「軍歌」（「詩作」）、神長瞭月「あゝ通州」（「雄弁」）、佐藤惣之助「銃後の赤心」（「富士」）、サトウハチロー「千人針」（同）、西条八十「戦争の詩」（「新青年」）、佐藤春夫「送別歌」（「中央公論」）、河井酔茗「敵影なし」（「女性時代」）、菊岡久利「歴史」（「改造」）、神保光太郎「戦火断章」（「文芸」）、浅野晃「西と東」（同）などの、十二年十月号の月刊誌に発表された詩篇や高村光太郎「秋風辭」（昭12・9・29作）とともに、大東亜戦争下の戦争協力詩の嚆

矢であろう。

第二次近衛内閣（一九四〇・七～四一・七）は、「新体制運動」を展開した。政党を解体し、全体主義的国民組織である大政翼賛会（一九四〇・一〇）、大日本産業報国会（同・一一）の設立につながる運動である。

大政翼賛会は、国家国民の総力を結集する国民組織として、統制を強化する道を開いた。

この翼賛会の中に文化部（初代部長岸田国士、二代目部長高橋健二）があった。文化部の運動活動の中に「詩歌翼賛運動」というのがあり、詩歌翼賛図書『朗読詩集地理の書』、『常盤樹』、『大詔奉戴』、『軍神につづけ』、『組長詩篇』、『国民の歌』、『内原の朝』、『翼賛詩歌集』などを発行した。

同会宣伝部では、『興亜詩集』を発行している。このような図書刊行の他にも、「大詔奉戴日の歌」（作詞尾崎喜八）、「アジアの力」（作詞江口隼人）、「みたみわれ」などに代表される戦争歌謡を撰定した。

第三次近衛内閣（一九四一・七～一〇）は、対米交渉の決裂から大東亜戦争へ、という橋渡しの役割を演じ、開戦時の東条英機内閣（一九四一・一〇～一九四四・七）が成立する。

さて、開戦当時に割拠していた文芸諸団体は、第二次近衛内閣の「新体制運動」を受けて、あいついで結成されたのであった。誰もが「新体制のバスに乗りおくれるな」と、動きまわったのだ。

もっとも、それらがすべて、新体制への無条件参画とみるのは、皮相的にすぎよう。敗戦後の発言ではあるが、当時「文芸」の編集長であった巌谷大四は政府が押しつける文芸国策よりも、「早手まわしに、こちらから先に結成して進言した方が幾分ましなものになるだろう」ということで結

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

成したものが、かなりあった、とのべている。

「日本詩人協会」は、神保光太郎・山本和夫・城左門・菱山修三・村野四郎・北園克衛・蔵原伸二郎・丸山薫・岩佐東一郎・田中克己が中心になって、一九四〇年（昭15）の秋に結成された。金子光晴外、会員は三十九名。

当時の資料に「十月二十一日、東日会館に参集した詩壇の中堅等は、新体制に即応すべき詩壇の統合団体たる日本詩人協会結成の打合わせを行った。これは内閣情報部、内務省図書課の斡旋による」とある。

同協会は、書きおろし詞華集『現代詩』春季版・秋季版を五集発行している。

その第一集（春季版　昭16）の「序」を抄録する。

……すでにわれらの国家が炳乎たる一大理想の方向に邁進し始め、国の凡ゆる部面に一元化が叫ばれるとき、ただひとり詩文芸だけが区々とした行きがかり的感情の上に足ぶみを続ける理由はない。いまや詩の世界にも日本詩建設の足場は架けられたのだ。詩及び詩人は一丸となつてそれへ掛るがよい。……

「大東亜戦争と詩壇・岩佐東一郎」（昭和17年春季版所収）は、開戦当時の詩壇の動きを知る格好の一文であろう。

「大日本詩人協会」には、北原白秋・河井酔茗・高村光太郎・佐藤春夫・堀口大学・萩原朔太郎か

ら、明治三十年代生まれの阪本越郎・火野葦平などの詩人がいた。「日本詩人協会」に対抗して、協会名の上に「大」の一字を冠している。老大家の参加を誇示したのであろうか。当時の詩誌などに、両協会の確執をうかがわせるような文がある。

この協会は、詞華集『聖戦に歌ふ』(昭17・6)を刊行した。同書には四十人の詩篇と、萩原朔太郎・川路柳虹・保田与重郎の評論が収録してある。収録詩篇の多くは、

蠔鐘かしこに沈みうせ
残兵わづかに白旗のもとに額づき蹲まれり
既にして硝煙の薄るる間に　日章旗翻翻としてここに翻り樹つ
ああげに狡猾老英帝国の政令　その陰謀と劫掠と
つひにかくしてわれらの圏外に
ながくこの閾の外に逐ひ出され了りたるなり
笑ふべし　手拍つべし　たたら踏むべし

(三好達治「新*嘉坡落つ」部分　*シンガポール)

のような戦争協力詩である。当時は、このような詩篇を、「国民詩・愛国詩」と呼称した。

一九四一年(昭16)二月に結成した日本青年詩人連盟には、伊波南哲・河西新太郎・加藤愛夫・川野辺精・内田博・浅井十三郎・上林猷夫・佐川英三・池田克己・田村昌由などがいた。「聖戦茲に

満四年を閲し、大東亜共栄圏の確立に向つて邁進してゐるの今日、世界の情勢は益々緊迫の度を加へるに至りました。勝敗は戦線よりむしろ銃後にありと謂はれてゐますが、我が連盟に於ては、先に『愛国詩の夕』を開催して、国民の士気を鼓舞すると共に、一大愛国詩運動を展開してきました。真に祖国を認識して、祖国を愛する日本古来の伝統を伝へ、『祖国と共に』の清らかにして、美しき精神を高揚することにつとめてきました」（『現代愛国詩集』後記・一部）という同連盟は、『現代愛国詩集』（昭16）、『興亜詩集』（同）、『大東亜戦争決戦詩集』（昭17）、『少国民海洋詩集』（昭18）などの詞華集を刊行した。いずれにも戦争協力詩が満載されている。『大東亜戦争決戦詩集』から、一篇だけ抄出しよう。

……

あゝ　天朝のこゝろは
雲煙たかく
声音かさなり
日本列島萬歳
日本列島ごうごうの
歌はうたはれ
三千年の道つきることなし

おん父の声のごとく
おん母の声のごとく
一木一草ことごとく
こゝにむかひ
こゝろして
南に西に北に
荒るる日くぢけず
さかんなる日むねをどらし
日本の声高く大きく
東にひかり
地にかゞやき
億兆のこゝろのこゝろ
天朝の道にひれふし
すべておろがみまつる

（田村昌由「宮城御前」部分）

「全日本女詩人協会」は、女流詩人の協同体として一九四一年（昭16）七月に結成した。島崎藤村・与謝野晶子を顧問に、井上淑子・江間章子・後藤郁子・壺田花子・永瀬清子・中村千尾・深尾須磨

子・町田トシコ・町田志津子など二十四名の女流詩人が会員であった。『母の詩』(昭16)、『新女性詩集』(昭17)、『海の詩』(昭18)などの詞華集を発行している。『海の詩』から、「夏の思い出」(中田喜直作曲)の作詞者・江間章子の一篇を引用しておく。

海の魅力　　江間章子

児よ
お前が眠つてゐたその日
勇ましい特別攻撃隊に
お前を抱いた母は泣いてゐた

何も知らないで
お前がすやすや眠つてゐた日
空も梢も木も泣いてゐた
日本人の心といつしよになつて

遙かなる真珠湾
胸を離れないその名

このあふるゝ光は遠くまで翼をひろげていくでせう
そしてお前はいそいで大きくなる
お前は勇ましい特別攻撃隊の話に胸をおどらせ海の彼方に若き軍神たちの幻を
見るほどに大きくなるでせう

「日本作歌者協会」「日本詩曲協盟」は、歌謡の作詞者を中心にした団体である。会員名簿には、佐々木信綱・北原白秋・小林愛雄・西条八十・野口雨情・堀内敬三・島田磬也・浜田広介・葛原しげるなどの名前が列記してある。

歌謡の作詞者たちが刊行した詞華集には、『皇紀二千六百年奉祝歌謡集』(昭15)、『愛国詩謡集』(昭18)、『御楯(みたて)われら』(同)、『御民征く』(同)、『日本詩年鑑』(昭19)などがあり、『日本詩年鑑』には「昭和十七年度会員作品活動表」という、当時の歌謡詩人たちの言動を記録した資料が収録してある。

これらの文芸団体の上に存在したのが、軍の出先機関である内閣情報部(後には単に情報局の名称となる)であった。この部は権力側の思惑を代表して、文芸者団体を統轄すべく暗躍した。

2

「新体制運動」とは別個に、文芸者団体の結成機運を促進した事件についても、語らなければならないだろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.